

# 地域の多文化間対話活動における 参加者のカテゴリー化実践 ——エスノメソドロジーの視点から——

杉原由美\*

キーワード: 多文化共生, 日本籍住民と外国籍住民, 相互行為, 多様なアイデンティティ, 一面的な関係性

## 要旨

世界的規模で人的移動が起こる中, 日本でも外国籍住民が急増し, その日本語支援に地域住民が関わる地域日本語活動が盛んに行われるようになった. この領域では現在, 多文化共生の観点から, 日本籍住民と外国籍住民が対等な立場で参加し対話を通じて問題意識を共有していくという活動が提起され模索されている. 本稿では, このような活動を「多文化間対話活動」と呼び, その相互行為に焦点を当てた実証的研究を報告する.

研究の目的は, 参加者が「〇〇人, ××人」といった一面的な関係性に固定されるのではなく, 多様なアイデンティティで関わる相互行為を実現する方策を探ることである. エスノメソドロジーの会話分析の方法により, 相互行為の中でどのようなカテゴリーが現れ, 各カテゴリーは何をきっかけに形成され維持されるのかを分析した.

分析と考察の結果, 本研究対象においては次の3点が明らかになった. ①相互行為の中では, 大別すると「日本人/外国人」カテゴリー対と『家族』『性別』カテゴリー集合の2種類が支配的に現れていた. 「〇〇人」カテゴリーは「日本人/外国人」という二項対立的なカテゴリー対の下位分類として現れていた. ②これらのカテゴリー化は質問をきっかけに起こり, 質問と返答という相互行為の中で相互達成的に形成されていく. そして「国籍カテゴリー有標質問」が「日本人/外国人」カテゴリー対を形成し維持する一因となり, 逆に「カテゴリー無標質問」は多様なカテゴリーの出現につながっていた. ③「日本語の説明」によってカテゴリーが表面化する. そして「日本語=日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が「日本人/外国人」カテゴリー対を表面化させ維持する一因となり, 逆にこの前提にとらわれない「日本語の説明」は多様な関係性につながっていた.

以上の結果から, 多文化間対話活動において多様な関係性での相互行為を実現するための具体的な示唆を得た.

---

\* SUGIHARA Yumi: お茶の水女子大学大学院博士後期課程

## 1. はじめに

世界的規模で国境を越える人々の移動が起こっている中、日本でもバブル経済と出入管法改正を背景に外国籍住民<sup>1</sup>が急増し、1990年以降彼らに対する日本語支援に地域住民が関わる活動が盛んに行われるようになった。この地域日本語活動<sup>2</sup>は、ニーズや意識の多様性を反映して実に様々な形態で行われ、活動の目的や方法に関する議論も活発になされている。

日本語教育学会は国内の日本語教育ネットワークを6年に互って調査し、その結果に基づいて「地域日本語教育に関する提言」(尾崎他 2000)を出している。この提言の「基本的な考え方」では、多文化共生の地域社会の実現を目標とし、同じ地域社会に住んでいても外国籍住民と日本籍住民の出会いが少ないことを問題視した上で、両者が出会い「教える—学ぶ」関係ではなく相互に学習するという対等な立場で、対話を通じて問題を共有し人間的なつながりを強めていく場が必要であると述べられている。また、岡崎(2002)は日本語教育を多言語多文化共生社会を言語面で支えるものとして位置付け、内容重視の第二言語教育の観点から定住型外国籍住民を対象とする場合の方法を提起している。それは、母語話者と非母語話者の間のコミュニケーションを通して創造される「共生言語としての日本語」<sup>3</sup>を媒介とし、双方にとって具体的に意味のあるやりとりを通じて、自分や相手の思考の枠組みに気づくこと・感じ方や考え方が変容すること・自己成長を実感することを目標とする活動である。本稿では、以上の尾崎他や岡崎の提起する視点で行われる活動を「多文化間対話活動」と呼ぶ。

足立・松岡(2001)によると、地域日本語活動の中で「教える」ことを全て排除し、参加者全てが対等な関係であることを意識した交流主体型の活動は増えてきているという。しかし、このような活動については、理念的な議論や実践の概要報告は行われているが、活動現場を実証的に研究した報告は見当たらない。活動を発展させていくためには、現場で今まさに起こっていることを検証する必要がある。本稿では、地域の日本籍住民と外国籍住民が参加し、各自の問題意識にそった話題を共有していく地域の多文化間対話活動の実践における相互行為に焦点を当てた、実証的研究の結果を報告する。

<sup>1</sup> 外国籍住民には、外国人登録者をはじめとして難民・中国帰国者・日本人配偶者・日系人も含める。

<sup>2</sup> 「地域日本語活動」という呼称は西口他(2001)に従った。他に「地域日本語教育」「地域日本語学習支援」「地域日本語共育」とも呼ばれている。

<sup>3</sup> これは、母語話者の頭に内在化された母語話者間のコミュニケーションの手段となる日本語とは区別されるものである。

## 2. 先行研究と研究目的

西阪（1997）、河野（1999）は異文化間コミュニケーション<sup>4</sup>を再考するために、吉川（2001）は異文化間交流活動に改善点を見出すために、それぞれエスノメソドロジーの視点で異文化間の相互行為を分析している。エスノメソドロジーとは、社会的事実(例えば「異文化間」であるという事実)を自明視せず、メンバーの相互行為の結果達成されるものと見なし、ある社会や集団に属している人が無意識に用いている考え方ややり方を探究する社会学の1つの視点である。上記の3つの先行研究では、会話の中で参加者たちが自己と他者をどのように位置付けているのかというカテゴリー化実践に注目して、その現象を詳細に分析し記述している。

西阪（1997）は、従来の異文化間コミュニケーション研究では、異文化性や文化差がコミュニケーションの諸特徴を説明するための根拠とされ、議論の前提となっていることに疑問を投げかけ、留学生へのラジオインタビュー番組の1対1会話を分析した。その結果「『日本人である』こと、『外国人である』こと、『異文化間コミュニケーションである』こと、相手と自分と『異なる文化に属している』こと、こういったことは、すべて相互行為のなかで、相互行為の偶然的条件に依存しながら、参与者たちがいわば協同でそのつど成し遂げていることである」（1997: 103）と述べている。西阪の研究は、異文化間コミュニケーションを「〇〇人」というカテゴリーでの相互行為としてエスノメソドロジーの視点で分析する可能性を切り開いた点で意義があり、この研究を受けて次の2つの研究が行われた。

河野（1999）は、日本事情教育での日本人学生と留学生の異文化間コミュニケーション授業について論じるために、異文化間コミュニケーションの具体例として日本語ボランティア活動の3名の会話を分析した。そして、コミュニケーションとは最初から「〇〇人、××人」と想定して始まるものではなく、参加者の協同作業によっては変換され得るものであるという分析結果を得て、異文化間コミュニケーションの視点ではらむ矛盾について考察を行っている。さらに河野は、日本人学生と留学生合同クラスで異文化が強調されれば、「〇〇人、××人」という関係性が固定化してしまう危惧を述べ、「『〇〇人、××人』コミュニケーションを強調するのではなく、もっとコミュニケーションの多様性に注目しなければならない」（1999: 51）と指摘している。この「コミュニケーションの多様性」を、「〇〇人、××人」といった一面的な関係性のみに固定されることなく多様な関係性で相互行為が行われることと捉えると、「多文化共生」や「人間的つながり」を強めていくことを目指す多文化間対話活動にも大きな意味のある指摘である。

吉川（2001）は、滞日留学生を講師とする小規模講演会における質疑応答会話を対象に「異文化間交流」という現象が相互行為を通して成し遂げられていく様子を記述し、活動に改善点を見

<sup>4</sup> 本稿では、「異文化間コミュニケーション」は「異文化コミュニケーション」と同義とし、「異なる文化圏に属する(とされる)2人以上の人びとの間でのコミュニケーション」（西阪1997: 73）と捉える。

出すことを目指している。結論としては、異文化間交流は相互行為の中での自己と他者の位置付けの交渉やカテゴリーのせめぎあいを通して展開されるものであり、副産物としてステレオタイプが産出される危険性の指摘をしている。

本研究は、これらの結果を参考にした上で、先行研究では明らかにされていない以下の点について追究していく。先行研究では、異文化性を帯びた「〇〇人、××人」というカテゴリーを参加者たちがいかに協働で維持しているかを詳細に記述することに焦点が当てられており、そのカテゴリー化のきっかけにどういった行為が関与しているかを見出すような視点での分析は行われていない。また、河野は日本人学生と留学生合同クラスについて『〇〇人、××人』コミュニケーションを強調するのではなく、もっとコミュニケーションの多様性に注目しなければならない」と指摘しているが、河野の分析からは、どのように「〇〇人、××人」の強調が起こり、どうすれば多様性が現れるのかといった具体的な方策はみえてこない。

そこで本研究では、多文化間対話活動を対象として、「〇〇人、××人」といった面がどうしても意識されがちな出会い方をしながらも、「〇〇人、××人」という一面的な関係性のみに固定されることなく多様な関係性が現れる方策、つまり多様なアイデンティティをもった個々人として関わる相互行為が実現する方策を探ることを目的とし、次の2点を研究課題とする。

課題① 相互行為の中で、参加者はどのようなカテゴリーで関係性を形成しているのか。

課題② そのカテゴリー化実践の生じるきっかけと維持に関わる要因は何か。

### 3. 研究方法

#### 3-1. 分析方法

分析は、エスノメソドロジの会話分析の方法で行う。Sacks (1972a,1972b,1995) の成員カテゴリー化に関する概念を用い、Schegloff (1991) の制度的状況の会話分析の方法に従う。

人は誰かと出会う時、必ず特定の何者かとして出会っている。その「何者か」という意識は、会話の中に現れてくる。Sacks は、会話の参与者自身が、どのような方法に従って自分を含む参与者をあるカテゴリーに属すると位置付け、またそのカテゴリー化実践がどのようなことと関連するのかについて、以下のような一連の概念を示した。

① 成員カテゴリー化装置 (membership categorization device, 以下「カテゴリー化装置」と略す)

例えば「母親」「父親」「子供」というカテゴリーは、『家族』というカテゴリー化装置に属している。この装置には、『家族』のような「カテゴリー集合」と、「大人/子供」というように対比される「カテゴリー対」がある。

② カテゴリー化装置使用の2つの規則

経済規則 (the economy rule)——ある個人は自分が帰属できるものとしていくつかのカテゴリーを持っており、発話の度に少なくともその内1つのカテゴリーが当てはめられる。

一貫性規則 (the consistency rule)——ある個人があるカテゴリー化装置に分類されると、その次に言及される個人も同じ装置で分類され得る。

### ③ カテゴリー付随活動 (category-bound activities)

カテゴリー化された個人はそのカテゴリーに付随した活動や知識、関わり方を期待される。特に、対を形成するカテゴリーには義務や権利が伴ってくる。

人は以上のようなカテゴリー化に関する知識を持ち、無意識のうちにそれを使って自分を含めた個人をあるカテゴリーに属すると見なしているのである。

Schegloff (1991) は会話分析の立場から「会話と社会構造」について論じる中で、上記の Sacks のカテゴリー化の概念を用いて、制度的状況 (Institutional setting) の会話を分析する方法を示している。制度的状況とは、教室・医療・法廷場面等の、確立され制度化されたある場面を指す。この枠組みでは、制度性とは外在的な条件や環境によって前もって一律に決められているのではなく、常に当該の相互行為の参加者が具体的な会話的やりとりの詳細な作業を通してつくりあげる実践とみなされる。

Schegloff は、分析の際に配慮すべき点を2点あげている。まず1点は、当事者が互いに重要視しているカテゴリーに注目し、今焦点を当てている場面状況が当事者たちによって志向されていることを示すことである。それによって、当事者たちがどのように当該場面構造をつくりあげるのかが示される。2点目は、場面状況がどのように会話のあり方に特定の結果をもたらすのかを示すことである。2点とも、相互行為データを詳細に記述し分析することが重要となる。

本研究では、地域の多文化間対話活動で、参加者が何者として相互行為を行っているのか、参加者ら自身の会話のみに手掛かりを求めて詳細に記述する。また、繰り返しパターン化されて現れる特徴的な会話のあり方を探り、どのようなプロセスで形成されるのかを記述する。先にあげた研究課題に対する分析観点を整理すると以下ようになる。

課題① 参加者はどのようなカテゴリーに属して発話しているのか、相互行為の中にどのようなカテゴリー化装置が存在するのかという観点から、参加者自身の発話のみに手掛かりを求めて分析する。

課題② 相互行為の中で各カテゴリー化装置は何をきっかけに生じ、維持されるのかという観点から、各カテゴリー化装置が現れるプロセスと特徴的な会話のあり方に注目して分析する。

## 3-2. 研究対象

本研究の対象フィールドは、東京都内某大学の周辺地域住民を対象とした多文化間対話活動で

ある。この活動は、地域の日本籍住民と外国籍住民が参加し、対話を通じて各自の問題意識を共有することを主旨として、2000年12月から2002年7月現在まで、基本的に2週間に1回2時間、当該大学の教室を借りて行われている。毎回、参加者のうち1名が話題を提起して話し合う。本研究では2000年12月から2001年3月までの活動を研究対象とする。参加者の属性は以下のとおりである。

出身	日本×10名、中国×2名、韓国、フィリピン、イラン、インド (滞日5~14年、主に2001年3月時点でOPI上級下と上級中)
年代	20代~70代
性別	女性15名、男性1名
職業	専業主婦、自営業者、定年退職者、パートタイム就業者、学生

参加者とは、この場に参加している者全員であり、運営に関わった者も含めている。運営とは、教室の確保・必要に応じたミーティング・交代で話し合いの進行を補佐することで、筆者を含めた当該大学の学生5名が行った。参加者募集の経緯について簡単に述べると、当該大学大学院日本語教育コースの実習として開催された、日本籍住民と外国籍住民が共に社会を考える交流クラスの対象者と実習生の有志が、実習後も継続して集まりを企画したものである。

2000年12月から2001年3月には8回の活動があり、各回によって全体・グループ・ペアと様々な形態で話し合いが行われた。本研究では、以下の4回の録音文字化資料を対象データとする。この4回は「話題提起に基づいた出席者全員での話し合い」であり、基本的に同じ構成メンバーによる同じ形態での話し合いといえる。

事例 A	2000・12・19	話題「主人という言葉」	話題提起者 J1
事例 B	2000・1・23	話題「テレビの与える影響」	話題提起者 F1
事例 C	2001・2・6	話題「くだらない風習・習慣」	話題提起者 J3
事例 D	2001・3・27	話題「子供の教育」	話題提起者 F3

なお本稿では説明上の利便性から、会話例の中で日本籍住民は J、外国籍住民は F と記す。その他の文字化資料の記号については、本稿末に記載した。

#### 4. 分析と考察

まず課題①に対して、Sacks のカテゴリー化に関する概念を用いて、参加者はどのようなカテゴリーに属して発話しているのか、相互行為の中にどのようなカテゴリー化装置が存在するのかという観点から、参加者ら自身の発話のみに手掛かりを求めて対象データを分析した。その結

果、大きく分けて2種類の支配的なカテゴリー化装置が見られた。「日本人/外国人」カテゴリー対と、『家族』や『性別』といったカテゴリー集合である。あるカテゴリー化装置が「支配的になる」とは、時には他のカテゴリー化装置に変わることもあるがすぐに元に戻って、大きな枠として同じカテゴリー化装置が維持されるという意味である。一時的に現れたカテゴリー化装置としては、「幼稚園児の親/幼稚園についての素人」「親/元教師」や『世代』など様々なものがあった。

次に課題②に対して、相互行為の中で各カテゴリー化装置は何をきっかけに生じ、維持されるのかという観点から、各カテゴリー化装置が現れるプロセスと特徴的な会話のあり方に注目して分析した。支配的なカテゴリーが初めて現れる場面に注目して分析した結果、「質問」という行為がカテゴリー形成のきっかけになっていた。そして、一旦支配的なカテゴリーが形成された後もこの質問行為が頻繁に見られ、カテゴリー化実践を極めて明示的に現すと同時に、支配的なカテゴリーを維持する機能も果たしていた。さらに「日本語の説明」という行為も、カテゴリー化実践を極めて明示的に現すと同時に支配的なカテゴリーを維持する機能も果たしていた。

さて、これらの分析とそれに続く考察の具体的な説明は、課題②の結果である「質問」と「日本語の説明」を軸として展開する。その中で、課題①の結果である「日本人/外国人」カテゴリー対と、『家族』『性別』カテゴリー集合の事例を挙げ、その特徴について説明する。

#### 4-1. 質問をきっかけとするカテゴリー化実践

##### 4-1-1. 分 析

〈「日本人/外国人」カテゴリー対が支配的な事例〉

**会話例 1** (事例 B の話し合いの冒頭) F1 による「テレビの与える影響」についての話題提起直後。

01 F2 : 話す前にちょっと聞きたいことがありますけど、日本は、あーテレビジョン、なんかドラマとか、えっとプロついて、なにかティービー放送のケンレツですか、それないんですか。

02 J8 : 検閲

03 J1 : 検閲ね

04 F2 : うん検閲、ないんですか。

05 J10 : あることはあるんじゃない[の]

06 J8 : [あるんじゃないですか[ねえ

07 J3 : [ビーとか入るしね

08 J8 : うん

09 J1 : 多少はあると思いますけども、段々ゆるくなってきたんじゃないでしょうか。むかしーはね、むかし例えば、例えばあの映画でもすね {省略}

10 F2 : そうですね。私が初めて来て思ったのが、それだったんですよ。

上記のやりとりの中で参加者は何者として発話しているのだろうか。まず、発話 01 と 04で「日本は…」と質問している F2 は何のカテゴリーに属しているのか。この発話のみから分かることは、日本のテレビ放送の検閲について知らない者ということである。次に、発話 05, 06, 07,

09で J10, J8, J3, J1の4人が返答をしている。「カテゴリー付随活動」の概念から、この4人は、自らを「日本はティービー放送の検閲ないんですか」という質問に対する返答を期待される者と捉えているといえる。つまり、「日本」もしくは「テレビ放送」の知識を多く持っているカテゴリーに属する者として返答している。続く発話10では、F2は「私が初めて来て思ったのが」と述べ、日本(ここで出ている唯一の場所)以外から日本に来たいわゆる「外国人」として、J10, J8, J3, J1の4人は元々日本にいる人である「日本人」として(テレビの専門家ではなく)会話をしていることが分かる。

まとめると、まず「日本は、テレビ放送の検閲ないんですか」という質問が投げかけられ、その質問に返答することによって「日本人」カテゴリーが現れた。それまで何者として話を聞いていたかに関わらず、質問が投げかけられた途端、4人が「日本人」として自分の知っている情報を駆使してどうにか答えようとしている。この直前にされた「テレビの与える影響」についての話題提起の内容は、国単位でのカテゴリー化はほとんど見られず、子供から老人までを含んだ教育としてのテレビの役割について考えたいという主旨であった。しかし、ここで生じた「日本人/外国人」カテゴリー対は、「韓国人」「中国人」などの個々の国籍カテゴリーを巻き込み、またそれらを統合する形で「外国人」カテゴリーを再構築し、話し合いの最後まで繰り返し浮上した。

次に、質問に返答することで「外国人」カテゴリーが生成される例を示す。

**会話例2** (事例Cの話し合いの冒頭) J3による「友人が嫁いだ千葉県での大掛かりな七五三祝い」についての話題提起の後に、写真を見ながら千歳あめに関するやりとりがあった後。

- 01 J6 : あの一えっとみなさんの国で子供を祝うようなこんな一習慣てありますか? 子供の成長を祝うような習慣。
- 02 F1 : イランであります。 女の子9歳になると、男の子は15歳、えーと宗教の、{省略} パーティみたいです。でもやらない人もいます。すごく派手一派手であの一なんかやってる人もいます。
- 03 J6 : 学校でもやるし、家でもやるけど、家ではやらない人もいるということですよ。 あと一中国なんかどうですか?
- 04 F6 : 中国一の場合は、私は漢民族ですよ。 漢民族はだいたい赤ちゃんのほうをすごくお祝いしてますよね、あの一何か2ヶ月のとき一必ずすごくにぎやかな一式やります。あと3ヶ月。あとは一1歳と3歳の時、それだけかな? はい。
- 05 F3 : フィリピンの場合は、生まれてえっと一生まれて3ヶ月なつてから、あれあの一結婚式みたいな洋服一白いの洋服着替えさせて、で帽子もそれで教会いく一みたいな、でそれ終わってから、家にもパーティやります。 ちょっと同じかな?

発話01「みなさんの国」とはどこを指しているのだろうか。発話02の返答から「イラン」が「みなさんの国」に含まれていること、そしてF1は「みなさん」の一人で「イラン人」カテゴリーに属していることが分かる。発話04, 05の「中国」「フィリピン」についても同様である。つまり「みなさんの国で子供を祝うようなこんな習慣ありますか?」という質問は、「みなさんの国」対ここ「日本」という対比を行い、「外国人/日本人」というカテゴリー対を形成しているの



まず、発話 03 で J1 から F3 の「旦那さん」について質問された。発話 08 「お父さんはね」という返答で F3 は「妻」というカテゴリーで発話しているといえる。それに対して、J1 はいわば「家族外の人」「部外者」カテゴリーにある。また、発話 03 「分かる？ 協力的」の部分では「日本人 / 外国人」カテゴリー対も垣間見られている。

この後、J1 からさらに「毎日は大体何時ごろお帰りますか」「土日はお休みですか」「長男は野球やるの?」、F2 から「4歳と6歳の子供に16歳の長女が助けてあげますか」という質問と F3 の返答のやりとりが続いていった。こうしたやりとりが進む中で、「お父さんがボーイフレンド呼んで、『おまえどういうつもりなんだ』と、僕ならそうやりたいと思います」「ちょっとすみません、私の娘と同じ85年生だから」「子供の立場からすれば」という発話が現れて、「母親」「父親」「子供」といった参加者それぞれの家族内での立場を反映したカテゴリーで相互行為が行われるようになっていった。「家族外の人 / 妻」といったカテゴリー対から『家族』カテゴリー集合へと発展したといえよう。

また、話し合いの後半に支配的カテゴリー化装置がそれまで続いていた「日本人 / 外国人」から『性別』に転換した事例もあった。これらの『家族』や『性別』カテゴリー集合といった「日本人 / 外国人」以外で支配的になるカテゴリー化装置の特徴としては、参加者全員が共有できるカテゴリー化装置という点がある。そこから派生して、「幼稚園児の親 / 幼稚園についての素人」「親 / 元教師」や「若い人 / 若くない人」等々のカテゴリー化装置が一時的に現れていた。そして、支配的カテゴリー化装置が「日本人 / 外国人」から『性別』に転換した場面(事例 A)を分析すると、「それは女性の側から見てですか？ 女性の側から見て内助の功っていうのを発揮しようとする女性が減ってきたという意味ですか？ それともそれを、内助の功っていう支えられ方をする一、しなくてもいいよって思う男性が増えてきたのかな？」と、はっきりと「女性 / 男性」というカテゴリー対を提示した質問をきっかけとして、カテゴリーの転換が起こっていた。

さて、先に見た「日本人 / 外国人」カテゴリー対の事例と同様、『家族』や『性別』カテゴリー集合が出現するプロセスでも、「質問」がきっかけとなっていた。つまり質問によってあるカテゴリー化装置が明示され、その質問に返答することでカテゴリーに当てはまっていくプロセスが見られる。質問は、質問をする側の想定するカテゴリーを相手に当てはめる機能を果たすのである。また逆に、質問をする側も質問していく中で、あるカテゴリー集合に当てはまっていくプロセスも見られた。つまり、質問と返答という相互行為の中で、相互達成的に支配的なカテゴリー化装置が形成されていくのである。

質問以外でカテゴリーを形成する場面もあったが、その場全体のカテゴリー化装置を規定していく力は弱い。例えば、『家族』カテゴリー集合が支配的になっている場面で、J3 が「でも普通ね、お父さんは、女の人より、男の子は『まあ男だから』って放任主義になるけど、長女っていう女の子は結構厳しいですよ、日本人のお父さんは。」と、自分を「日本人」とカテゴリー化し、

相手を「外国人」とみなす発話をした。しかし、それに対して F3 は、「いやお父さんも妹いたから、妹のこともすごくお母さんが厳しかったんだって」と「妻」カテゴリーで発話を返し、「日本人 / 外国人」カテゴリー対は続いていかなかった。質問でなければ、提示されたカテゴリーで返答する必然性はないのである。

#### 4-1-2. 考 察

以上の分析から、質問がカテゴリー化のきっかけに関与していることが分かったが、さらに詳しく考察するためには Maynard (1991) の「有標 / 無標的質問」という概念が参考になる。Maynard は、発達障害専門の医療機関で、医者が子供に障害があることを親に告げる面談の会話分析を行い、医者が親の見解を問う質問に「有標的質問 (marked queries)」と「無標的質問 (unmarked queries)」の 2 つの類型があることを発見した。「有標的質問」とは「お子さんの問題は何かとお考えですか」と障害が子供に所在しているものとする質問である。医者の見解に親が同意する場合会話は円滑に進むが、親が医者の見解に抵抗するなら会話は困難なものになり、結局やりとりの中で質問の受け手である親側に立場を変えるよう求める仕方がとられる。「無標的質問」とは「今 R のことをどうお考えですか」と問題を提示しない質問である。このタイプの質問は、この問題とは別の事柄を話題にする機会を生み出し、「無標による多様性」によって一致している見地も相違している見地も両方をうまく扱えるという特徴がある。

本研究では「〇〇人、××人」といった一面的な関係性のみで固定されることなく多様なアイデンティティの現れる相互行為が実現する方策を探る視点から、「〇〇(国)ではどうですか」といった国籍カテゴリーを提示する質問を「有標的質問」として注目する。「無標的質問」とは「△△さんはどう思いますか」といったカテゴリーが提示されない質問である。以下に、まず「無標的質問」から具体的に説明する。

**会話例 4** (事例 B) 親戚の祝い事への招待よりも家族旅行を優先することは「日本では」難しいという話の後。

- 01 J6 : これとこれは {黒板の絵を指して} 別じゃなくて、ひとつの家なんだ。F1 さんたちなんかどう？
- 02 F1 : わた[し]
- 03 J6 : [だからこの代表として行かなければならないってこと？]
- 04 F1 : 私、人によって一人によって見るんで、例えば夫と姑の性格とかどうですかとか、これを見て、親戚ももちろん大切なので、でも前からあの予定あったから、これをたぶん夫が断ったら大丈夫と思う、でもまだ、姑は性格どうですかとか、夫の親戚だから {省略}

この会話例では「日本人 / 外国人」カテゴリー対が支配的であったにも関わらず、「F1 さんたちなんかどう？」とカテゴリーを無標にした質問が投げかけられたことによって、F1 は出身国ではどうかという視点ではなく、その時話したい立場を選択し、「妻」もしくは「嫁」カテゴリーで返答している。この「F1 さんたち」という発言には「外国人」や「〇〇人」カテゴリーが暗示さ

れているにも関わらず、質問の表現自体にカテゴリーが無標であったことが大きな意味を持っていることが分かる。

「有標的質問」の例は、先に挙げた会話例1「日本は、テレビ放送の検閲ないんですか」、会話例2「みなさんの国で子供を祝うこんな習慣ありますか?」「中国なんかどうですか」などである。これらの質問は「日本人/外国人」カテゴリー対出現のきっかけとなっていた。会話例1と2では、質問で提示されたカテゴリー対に合意した返答がなされ、スムーズに協同で「日本人/外国人」カテゴリー対を構築している様子が見られる。

逆に、質問側の見解に受け手が同意しない例、つまり質問で提示された「日本人/外国人」カテゴリー対に対して、返答側がスムーズに合意しない例も見られた。簡単に説明すると、会話例2とはほぼ同じ形式の質問が繰り返されることで、結果的に参加者が「外国人」カテゴリーに押し込まれたのである。まず、七五三のお祝い金に対して「みなさんの国で考えてどうだろう?」と質問された。ところが、出身国ではどうか、〇〇人としてどう考えるかという返答はなく、日本で生活し家計を担っている者としての「結婚式を含めたお祝い金相場」に関するやりとりが続いた。そこへ「中国なんかとかであの、イランでお祝いするときにこういうのはどうなんですか」とより限定された形で質問が繰り返され、イランについて返答が試みられるものの結局「うーんーあの・・・そうですねー」と発話が途絶える結果となった。それでも続けて「中国なんかは?」「フィリピンは?」と国籍カテゴリー有標質問が繰り返されていった。国籍カテゴリー有標質問が繰り返されることによって、日本での生活者として話そうとしている発言を阻み、Maynardの研究と同様に、結局質問の受け手に立場を変えるよう求める仕方で処理されたのである。

以上の考察をまとめると、本研究対象においては、「国籍カテゴリー有標質問」が「日本人/外国人」カテゴリー対を形成し維持する一因となっていることが明らかになった。「国籍カテゴリー有標質問」が高じると、自由な発言を阻み無理に受け手を「日本人/外国人」カテゴリー対に当てはめていく現象まで起こる。つまり、「国籍カテゴリー有標質問」は答えられるべき、力をもった質問なのである。逆に「カテゴリー無標質問」に対しては、受け手自身がカテゴリーを選択して返答することが可能になり、多様なカテゴリーの出現につながると考えられる。

## 4-2. 日本語の説明によるカテゴリーの表面化

### 4-2-1. 分 析

〈「日本人/外国人」カテゴリー対が支配的な事例〉

次に、日本語を説明することで「日本人/外国人」カテゴリー対が明示的に表面化して、結果的に「日本人/外国人」カテゴリー対維持の機能を果たしている例を示す。

**会話例 5** (事例 A)イランでは自分の子供や配偶者に対して「さん」付けて呼ぶという話。

01 J1 : 例えばなんとかさんだとか、そういう風に向こう言うわけですね。

- 02 F1 : それはとてもいいです。もし、使わないとあまり  
 03 # (数人) : あー、  
 04 J1 : あー、そう。あの日本は全然逆だって [いうことご存知ですね？]  
 05 F1 : [そうそう、そうですね。]  
 06 J1 : 日本はその自分の、[身内って分かります [よね？]  
 07 F1 : [うん [そうそうそう  
 08 J1 : 身内の者については [その尊敬語敬語は使わないです。あー  
 09 F1 : [そうそうそうそう

ここでは、J1が「日本人」であることが非常に大きな意味を持っており、そのカテゴリー付随活動として日本語の説明を行っている。F1は発話 05, 07, 09 を J1 の発話に重複させており、F1がこの説明内容をすでに理解していることが分かる。つまり J1 が一方的に日本語のルールの説明をすることで「日本人」カテゴリーに属し、その結果、相手が非日本人としての「外国人」であることが表面化する。このようなやりとりは「日本人 / 外国人」カテゴリー対の場面に特徴的な会話のあり方といえる。

〈『家族』『性別』カテゴリー集合が支配的な事例〉

では、『家族』『性別』といったカテゴリー集合が支配的な事例ではどうだろうか。ここでは「日本人」が「外国人」に対して日本語の説明を行う場面も見られたが、次の例のように「日本人」か「外国人」かに関係なく日本語の説明が行われる場面もあった。

**会話例 6** (事例 D)話し合いの前に、F3 の 4 人の子供について順にプロフィール説明しているところ。3 番目が幼稚園の年長であることが述べられた後で。

- 01 J7 : ネンチョウの「ネン」ってこれだった？ {黒板に「年」を書く}  
 02 # (数人) : {笑い}  
 03 F3 : {笑い} 私聞いても分からないよ。  
 04 # (数人) : {笑い}  
 05 J7 : ネンチョウ？  
 06 F3 : 長い、長い！ 長いの漢字 {笑い} 合ってる？ うん？  
 07 # (数人) : {笑い}  
 08 J1 : 合ってる合ってる合ってる、  
 09 J7 : ごめんなさい、分かんなくて {笑い}  
 10 F3 : で、次は、えーと、幼稚園。  
 11 J7 : はい、幼稚園の一？  
 12 F3 : 幼稚園のネン(チョウ / チュウ)で。  
 13 J7 : ネン？ {「年」と板書}  
 14 F3 : ショウ。  
 15 J1 : ショウ。  
 16 F3 : ネンショウ、小さ [い・・・ ショウ、少ない  
 17 F2 : [ネンショウになる？  
 18 J7 : 少ない、の？ えー、知らなかった。 {「少」と板書}

発話 01 で J7 は、幼稚園の「ネンチョウ」の「ネン」が「年」という漢字表記で正しいかどうか

か F3 に確認している。F3 は幼稚園年長児童の親であり、「幼稚園についての素人 / 幼稚園児の親」というカテゴリー対が成り立つ。ところが F3 は発話 02 「私聞いても分からないよ」と答え、自分を「表記についての知識がなくて当然な者」つまり日本語非母語話者である「外国人」としてカテゴリー化している。続いて、発話 05 で黒板に向かって「チョウ」の表記が分からない様子の J7 に対し、F3 が発話 06 で「長」という漢字であることを伝え、「合ってる？ うん？」と尋ねている。「幼稚園児の親」としての知識から「長」だと思ったが、「外国人」として日本語表記に自信がないため確認しているのである。J1 は発話 08 で「日本人」として確認に答え、J7 は発話 09 で「日本人」でありながら表記が分からないことを謝っている。ここでは、「日本人 / 外国人」カテゴリー対と、「幼稚園についての素人 / 幼稚園児の親」というカテゴリー対が混在している。次に、4 番目の子供の説明に移った発話 16 では、今度は F3 は自分から「ネンショウ」の表記を教えようとしている。発話 18 では、J7 は「年少」の「少」の表記を知らなかったと述べて、再び「幼稚園についての素人 / 幼稚園児の親」というカテゴリー対でやりとりが行われている。

つまり、F3 は発話 03 では「外国人」として発話していたが、発話 06 で「幼稚園児の親」としての発話が適当であったことに自信を得て、発話 16 では表記の問題に対しても躊躇なく「幼稚園児の親」カテゴリーで発話していると考えられる。そして発話 19 以降でも、「幼稚園児の親 / 幼稚園についての素人」というカテゴリー対でのやりとりが参加者全員を巻き込みながら続いて行くのである。ここでは、日本語表記の説明が行われたことによって、「幼稚園児の親 / 幼稚園についての素人」というカテゴリー対が表面化したといえる。

#### 4-2-2. 考 察

以上の分析から、日本語の説明をすることによってその場のカテゴリー化装置が表面化することが分かった。その日本語説明をさらに詳しく考察するためには、西阪 (1997) の「日本語の所有権」という概念が参考になる。西阪は、日本人の日本語に対する一般的な権利・資格を「日本語の所有権」と呼び、それが留学生へのラジオインタビューのやりとりの中に現れている様子を示している。「日本語の所有権」とは、日本人は外国人の日本語を誉めたり助言や評価を与えたりする資格を持っているという、日本人側も外国人側も持っている一般的な期待である。これは日本人より日本語能力がある非日本人がいたとしても、ある言語が「日本語」と呼ばれた途端に生じるものである。つまり、「日本語」は一般的に「日本人が所有しているもの」であると考えられていて、留学生へのラジオインタビューという状況の下では現実的に「日本人が日本語を所有していること」が相互行為の中で実践されているのである。

さて、本研究において「日本人が日本語を所有している」という考え方がみられる例は、先の会話例 5 「あの日本は全然逆だってことご存知ですよね？ 日本はその自分の身内って分かります

よね？ 身内の者についてはその尊敬語敬語は使わないです」、また会話例3「分かる？ 協力的」等である。これらの例に共通するのは、疑問が提示されていないのに「外国人」のための転ばぬ先の杖として、とりたてて日本語の説明がされるという点である。「〇〇って知っていますか」「〇〇って分かる？」という表現に代表される。このような姿勢が高じると次のような例を生じさせる。

**会話例7** (事例A) J1が夫について「お国ではどう呼ばれていますか」とF1に質問し、返答中。

- 01 F1 : でもイランは奥さんとか自分の子供に何々さんとか使うよく使う。だから、あの一え夫婦もあの一何か呼ぶ時は相手に対し [てとっても丁 [寧に、呼ぶんです。例えば
- 02 J1 : [うん [それは、ご夫婦、ご家庭の中で、あの一あなたがご主人をどう呼ばれるかということが1つあると思うんです。それとは別にですね、[別に、あ一夫のことをです[私例えば私に[イランにおいてはうちの夫がとおっしゃるの
- 03 F1 : [そう別にです。 [うん [そうそう
- 04 J1 : [かどうおっしゃるかっていうことです。
- 05 F1 : [うんうん [うん [そうそう
- 06 J1 : [うん [そうなんです[ね [そういう夫に対するそのお国の  
お言葉は、どういうことでしょうか、夫って言うかな、主人でも何でもいいんですけども、何て言ったって[どう呼ばれます？
- 07 F1 : [主人は一・一言わない

J1は発話02をF1の発言に重ねて始め、発話04にかけて「…っていうことです」と説明して、F1の日本語理解に問題があるという態度でF1の発言を阻んでいる。F1は「J1の意図は分かった上で発言している」ことを表現するために、発話03「そう別にです」等や発話05をたたみかけるように行っている。しかし、結局F1は発話01で述べたかったことを自由に発言することはできなかった(発話07)。「日本語＝日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」は、「日本人/外国人」カテゴリー対を表面化させるだけでなく、極端な例では「外国人」の発言を阻む結果をもたらすことがあるといえる。また、日本語の説明によって内容面でのやりとりが言語面での探究にすりかわり、打ち切りになってしまった例もみられた。

逆に「日本語＝日本人が所有している」という前提にとらわれない「日本語の説明」は、会話例6に現れている。この例では、連鎖の初めには「年長」の表記を尋ねられても「外国人」ゆえに答えることに躊躇していたF3が、「長」という漢字を的確に説明できたことに自信を得て、その後自ら「幼稚園児の親」としての知識を活用して「年少」という表記を説明しようとする姿勢の変化が見られる。「日本人/外国人」カテゴリー対で相互行為が行われていなければ、「日本人」でなくても知識差によって日本語に関する説明をする場面が現れるのである。このような日本語の説明は、多様なアイデンティティでの関係性を積極的に出現させると考えられる。

以上の考察をまとめると、本研究対象においては「日本語＝日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が「日本人/外国人」カテゴリー対を表面化させる一因となっていることが明らかになった。これが高じると、自由な発言を阻み、やりとりの内容面での探究が止まる

現象まで起こる。逆に「日本語＝日本人が所有している」という前提にとらわれない「日本語の説明」は多様な関係性の出現につながる。

## 5. ま と め

本研究は、地域住民を対象とした多文化間対話活動を対象とし、「〇〇人、××人」といった一面的な関係性のみで固定されることなく多様なアイデンティティでの関係性の現れる相互行為が実現する方策を探ることを目的として行った。研究課題は、① 相互行為の中で、参加者はどのようなカテゴリーで関係性を形成しているのか、② カテゴリー化実践の生じるきっかけと維持に関わる要因は何かの2点で、Sacksのカテゴリー化装置に注目して分析と考察を行った。その結果、本研究対象においては以下の点が明らかになった。

- 1) 相互行為の中で、参加者が形成していた支配的なカテゴリー化装置は、「日本人/外国人」というカテゴリー対、『家族』『性別』といった参加者全員が共有できるカテゴリー化装置であった。日本人以外の「〇〇人」というカテゴリーは局所的には現れるが、「日本人/外国人」という二項対立的なカテゴリー対がより大きな枠組みになっており、「〇〇人」とカテゴリー化することは「外国人」カテゴリーにつながっている。
- 2) これらのカテゴリー化装置出現のきっかけには「質問」が関与している。質問は受け手のカテゴリーを規定する機能を持つ。そして質問と返答という相互行為の中で相互達成的にカテゴリー化装置が形成されていくのである。その中で「国籍カテゴリー有標質問」は「日本人/外国人」カテゴリー対を形成し維持する一因となり、高じると自由な発言を阻み無理に受け手を「日本人/外国人」カテゴリー対に当てはめていく現象まで起こる。逆に「カテゴリー無標質問」には受け手が自由な立場で返答でき、多様なアイデンティティでの関係性につながる。
- 3) 「日本語の説明」によってカテゴリー化装置が表面化する現象が見られた。その中で「日本語＝日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が「日本人/外国人」カテゴリー対を表面化させ維持する一因となり、高じると自由な発言を阻んだり内容面でのやりとりが止まる現象まで起こす。逆に、この前提にとらわれない「日本語の説明」は多様なアイデンティティでの関係性につながる。

以上の結果には、本研究対象の場の特性やその時々話題など様々な個別的要因も関係していると考えられ、今後対象を変えての検証が必要である。しかし本研究の結果、先行研究で具体化していなかった多様な関係性を実現する示唆を得たことは意義がある。まず、「国籍カテゴリー有標質問」が「日本人/外国人」カテゴリー対を形成する要因の一つとして特定されたことによって次の示唆が得られる。多文化間対話活動においては、どんな話題であろうと「〇〇(国)ではど

うですか」という質問が容易にされやすい。無意識のうちに相手を「〇〇文化」「〇〇国」「〇〇人」の代表のような立場にしてしまうこの質問には意識的に注意を払う必要がある。また、「日本語＝日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が「日本人/外国人」カテゴリー対を表化させ維持する一因となっていた点については、本稿の冒頭で触れた「共生言語としての日本語」（岡崎 2002）を創出するという意識で対話に臨むことが、示唆として考えられる。

さて、本稿では多文化間対話活動において、多様なアイデンティティでの関係性が現れる相互行為への方策を探る視点で分析と考察を行った。しかしながら、本稿は「〇〇人」カテゴリーでの相互行為そのものを批判するものではない。日常世界では「私たち」と「あなたたち」の間に境界を引くことを含むカテゴリー化という現象は常に起こっている。その境界が「日本人」と「外国人」の間に固定化されることは大きな問題と考えるが、その境界から生まれる差異を資源として相互学習が起こる可能性もある。「日本人/外国人」カテゴリー対が現れた場面でどのような相互学習が起こっているのかという分析も今後の課題としたい。

## 謝 辞

本研究にあたって、研究対象となった多文化間対話活動の参加者の皆さんにご理解とご協力を賜りましたこと、お茶の水女子大学の岡崎眸先生、酒井朗先生、佐々木泰子先生をはじめ多くの方々からご指導とご助言を賜りましたことを、ここに記して感謝申し上げます。

## 文字化資料の記号

,	区切りまたはごく短い沈黙	.	文末の下降イントネーション
・	1つが約1拍の沈黙	?	文末の上昇イントネーション
ー	伸ばした音	{ }	非言語行動や特記事項
#	発話者不明	( )	聞き取り困難な箇所。聞き取りが確定できない時は( )の中に発話を記す。
[	発話の重なり。重なった発話は	( / )	聞き取りにくく、どちらの発音か確定できない箇所。
[	[の並びを上下でそろえる。		

## 参 考 文 献

- 足立祐子, 松岡洋子 (2001) 「地域の日本語学習支援——多文化間交流の視点からの提案——」『異文化間教育学会第22回大会発表抄録』。
- 岡崎 眸 (2002) 「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』, 凡人社。
- 尾崎明人, 内海由美子, 岡崎敏雄, 杉澤経子, 富谷玲子, 山田 泉 (2000) 「第15章地域における日本語教育に関する提言」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究最終報告』, 日本語教育学会。
- 河野理恵 (1999) 「『異文化コミュニケーション』としての『日本事情』——エスノメソドロロジーからの示唆——」『21世紀の「日本事情」創刊号』, くろしお出版。

- 西口光一, 米勢治子, 足立裕子, 春原憲一郎, 山田 泉 (2001) 「地域日本語活動と日本語教育者の役割」『日本語教育学会予稿集』.
- 西坂 仰 (1997) 『相互行為分析という視点』, 金子書房.
- 吉川友子 (2001) 「『異文化間交流の実際』——滞日留学生と日本人の相互行為分析から」野呂香代子, 山下仁編著『正しさへの問い』, 三元社.
- Maynard, D. (1991) The perspective-display series and the delivery and receipt of diagnostic news. In D. Boden & D. H. Zimmerman (Eds.), *Talk and Social structure*: 164–192, Cambridge. UK: Polity Press.
- Sacks, H. (1972a) On analyzability of stories by children. In J. J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*: 325–345, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- (1972b) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in Social Interaction*: 31–74, The Free Press.
- (Edited by Jefferson, G. with an introduction by E. Schegloff) (1995), *Lectures on Conversation Vol. I & II*, Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E. A. (1991) Reflections on talk and social structure. In D. Boden & D. H. Zimmerman (Eds.), *Talk and Social structure*: 40–70. Cambridge. UK: Polity Press.